

氏 名	田中 里佳
学 位 の 種 類	博士（教育学）
報 告 番 号	甲第463号
学位授与年月日	2017年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	変容的学習としての教師の実践的知識の発達に関する研究
審 査 委 員	(主査) 前田 一男 森田 満夫 本学文学研究科（教育学）教授 山崎 準二 学習院大学文学部教授

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文の構成

#### 序 章 研究の課題・方法

##### 第1節 研究の課題

##### 第2節 研究の方法と分析枠組み

##### 第3節 調査の概要と調査協力者・調査方法

##### 第4節 本論文の構成

#### 第1章 実証的分析Ⅰ：Y中学校の教師達

##### 第1節 北村教師：初任教師の実践的知識の発達

##### 第2節 西山教師：若手教師の実践的知識の発達

##### 第3節 東教師：中堅・熟練教師の実践的知識の発達

##### 第4節 総合考察および小括

#### 第2章 実証的分析Ⅱ：X中学校の教師達

##### 第1節 土屋教師：初任教師の実践的知識の発達

##### 第2節 草野教師：若手教師の実践的知識の発達

##### 第3節 青木教師：中堅教師の実践的知識の発達

##### 第4節 総合考察および小括

#### 第3章 実証的分析Ⅲ：教師の学習を支える教師達

##### 第1節 水谷教師：研究主任としての考え方の発達

##### 第2節 桜井校長：校長としての考え方の発達

##### 第3節 総合考察

#### 終 章 本論文のまとめと今後の課題

##### 第1節 教師の実践的知識の変容的発達過程とそのあり様

##### 第2節 教師の学習を支える教師とネットワーク

##### 第3節 本論文のまとめと今後の課題

#### 《参考・引用文献》

## （２）論文の内容要旨

本論文、は教師の力量形成を実践的知識の発達とし、その実践的知識の発達を変容的学習として位置づけ、教師の実践的知識のあり様、実践的知識の発達過程、個人の実践的知識の発達と他者との関係性を解明することを課題としたものである。

本論文の課題設定においては、教師の力量形成に関する先行研究について、教師の長期的な力量形成に関する研究としてライフコース研究とライフヒストリー研究、教師の実践的知識に関する研究、教師の発達を学習として位置づけている実証的な研究といった関連領域の検討を詳細に行った。これら先行研究の検討から、研究対象範囲の二極化と教師の学習過程のとらえ方について、授業以外の経験も教師としての発達の資源と捉え、特に学級指導や特別活動等、授業以外の教育実践も分析の対象とし、省察の質の異なりを明確にして教師の実践的知識の発達過程を解明することを目指そうとした。

研究方法としては、教師の学習の特徴を検討し、教師の実践的知識の発達過程を成人学習論の１つである変容的学習として位置づけた。分析枠組みは、変容的学習論で提唱されている省察概念を基にしたが、一般の成人とは異なる教師の学習を解明するにあたり、省察の実践家論を加えて構築したものである。分析においては調査協力者自身の「語り」をデータ（調査的半構造化面接法による調査）として用い、省察の深まる過程を明らかにすることによって実践的知識を構成している考え方の発達過程を明らかにしていった。分析において「語り」を用いたのは、教師の実践的知識の発達過程を変容的学習として解明するため、無意識のうちに行われた学習をも表出させること、暗黙である考え方とそれが何に影響を受けているのかを表出させること、学習が生起している文脈を表出させることを目的としたからである。調査協力者は新しい課題に共通に取り組む公立中学校の教師とし、複数の学校勤務経験がある教師を複数含むように縁故法によって調査協力者選定を行った。本論文においては、現代的な課題として教科センター方式導入を契機として授業改善に取り組む２つの中学校の教師達８名の事例分析を行った。

第１章ではＹ中学校３名の教師たちの事例分析を行い、実践的知識を構成する複数の考え方の発達過程を明らかにした。実践的知識の発達過程とその特徴について、省察の深まりに関する特徴について、学習を支える他者とのネットワークについて、を考察した後に、３名の事例分析について総合的な考察を行っている。その結果、実践的知識のあり様に関しては１点、実践的知識の発達過程のあり様に関しては２点、実践的知識の発達過程に関しては２点、省察の深まりに関する特徴としては、考え方の発達に必要不可欠である新たな視点を見出すという点から４点の知見を得ている。また、教師の学習を支えるという点からの他者とのネットワークに関しては３点が明らかにされている。しかし同時にＹ中学校の事例分析からは、生徒指導上の顕著な「荒れ」が無い事例を分析する必要、Ｙ中学校のように、物理的な環境が整っていない従来の校舎における事例を分析する必要、授業改善の文化が定着していない学校における実践的知識の発達を分析する必要、という次なる課題が提起されることになった。

第2章では、従来の建築の校舎において、生徒指導上の顕著な「荒れ」は無いが、授業改善の文化が定着していないX中学校3名の教師達の事例分析および総合考察を、第1章と同様に行った。その結果、実践的知識のあり様に関しては1点、実践的知識の発達過程のあり様に関しては3点、実践的知識の発達過程に関しては4点、省察の深まりに関しては、実践が立ち行かないような困難な状況が発生しておらず、考え方を変容させなくてはならない必然性が生じていない場合でも省察の深まりが導かれた特徴について4点の知見を得ている。また、教師の学習を支える他者とのネットワークについて、X中学校内のネットワークおよび校内研究会については6点、X中学校外のネットワークと教師の学習を支える場については3点が明らかになった。しかし同時に、授業改善の文化が定着していなかったX中学校において、校内研究の取り組みが実践的知識の発達に影響を与えていたこと、校内研究・授業研究の有無にかかわらず、オープンな関係性と共に「信頼感」を基盤として「安心感」や承認を得られるような受容的な教師たちの関係性の質が実践的知識の発達に影響を与えていたことも明らかになった。そこで、教師の学習を支える校内研究の取り組みは、どのような考え方のもとで創出されていたのか、教師の学習を支える教師たちの関係性の質は偶然的に生起していたのか、あるいは何らかの考え方のもと、創出されていたのか、この2点の解明という次なる課題が提起されることとなった。

第3章では、第2章における残された課題解明のため、X中学校の研究主任と校長の考え方を分析し、教師の学習に影響を与え、教師の学習を支える教師とは、どのような特徴を有しているのかについても考察を加えた。その結果、教師の発達を支える教師は、変容的に発達しながら他の教師たちの考え方の発達を支えたり、共感的にかかわったりしているということ、X中学校の校内研究の方向性は、教育行政から課せられた課題をそのまま受容するのではなく、自己の経験や書物等を用いて批判的な検討を深め、X中学校の文脈に位置づけて課題を問題へと再構成することによって設定されていたこと、再構成された問題設定における校内研究の方向性が最終的に次期学習指導要領（2021年度全面実施）で示される「アクティブ・ラーニング」を先行実施した取り組みとなって、教師たちのエンパワーメントに貢献していること、校長という学校において影響力の強い立場の教師の考え方が浸透することによって、教師の学習を支える教師同士の関係性の質は創出することができると考えられること、を明らかにしている。

終章においては、2つの中学校別に明らかにした知見を総合的に考察し、本論文のまとめとして最終的に次の7点が提起された。具体的には、教師の発達した実践的知識のあり様は子どもについての考え方の比重が高いこと、実践的知識の発達過程においてはおよそ3種類の発達のあり様が認められたこと、考え方の発達過程においては新たな視点を見出すことが重要であり、その際にはコミュニケーション的学習がなされていること、教師の変容的学習のあり様は極めて自律的であること、教師たちの関係性の質を整えるという貢献は教師の学習にとって極めて重要な貢献ということ、教師の変容的学

習を支えるためには教えるという行為は意味をなさないということ、教師の変容的学習を方向づける教師は自らも変容的に発達しながら他の教師の考え方の発達を支え、実践を共に行い共感的にかかわっていることを説得的に指摘した。

## Ⅱ．論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論文の特徴は、第一に、近年の教師教育研究の重要な課題、すなわち教育専門職としての教師の有する実践的知識とその生成と変容の実態を解明しようとする研究課題に、自らの30年余りに及ぶ小・中学校教職経験に立脚して、真正面から取り組んでいる点である。現職教員の研究は、研究的問いの立て方や目的が実務的なものに傾斜し、理論的分析や枠組みも曖昧なままに展開されがちであるのに対して、本論文は、関連する先行研究の整理と批判的検討、研究の方法と分析枠組みの構築、さらに諸概念の定義などが厳密に行われており、学術的な研究論文としての手続きと質を堅持している。

第二に、研究方法の独自性が顕著に認められることである。本論文は、教師の実践的知識の発達を捉えるにあたって成人教育分野における変容的学習論に着目し、そこから研究方法と分析のための理論的枠組みを導き出している。経験的に語られがちな教師の力量形成の内実に対して、理論的枠組みを果敢に援用し、その実証的な検証に成功している。

第三に、研究対象として8名の現職教師に自らの経験の省察を促しつつ、その「語り」を質的に丁寧分析している。その質的分析が綿密であると同時に、単に授業実践経験だけにとどまらず、学級指導や特別活動の実践経験、個人的生活経験に、さらには所属校の研究主任や校長も含めることによって、異なった領域での経験や省察がそれぞれの領域における実践的知識の生成と変容に影響を与え合っている実態を明らかにしている。

### (2) 論文の評価

本論文は、教師の実践的知識の発達過程を変容的学習として解明することを研究課題として、教師の実践的知識の発達過程とそのあり様を明らかにしただけではなく、教師の信念とも言える暗黙となっている実践的知識の存在とその影響を明らかにしつつ、「同僚性」や教師の「協働」と総称されていた、教師の学習に貢献する教師の行為を実証的に明らかにした点は、きわめて高く評価できる。特に、実践的知識の発達において重要な省察が、どのようにして深まり、既成の考え方からいかに転換が行われ、再解釈や再構成が果たされたかという一連のプロセスを明らかにしたこと、教師個々人の発達とその質のあり様を個々人の資質能力だけに起因させるのではなく、職場内外のコミュニティのあり様やそれへの参加状況とも密接に関係していることを具体的に描き出したことは、今後の研究においてもさらには実践においても重要な示唆を持つものとなっている。

現代的な問題意識を持つ論文であることから、審査委員会からは、実践的知識の生成と変容の基盤づくりとしての教員養成教育の在り方や、政府の教員の資質向上政策との関連が問われたが、いずれも今後の研究課題に属する課題であり、本論文の価値を損ね

るものではない。教師の実践的知識に関する研究として理論と実証を兼ね備えた先駆的研究として高く評価でき、今後の研究の進展が大いに期待される。